

ラーゲルレーヴ『エルサレム』の「周縁」性  
オーディン、ロキ、オデュッセウス、ユダとの比較

日本学術振興会特別研究員 PD 中丸 禎子  
東京理科大学・明治大学非常勤講師

2010年6月19日 日本比較文学会第72回全国大会（於：東京工業大学）


【対象テキスト】

- ・ Selma Lagerlöf (1858-1940): *Jerusalem*, 1901-02
- ・ ラーゲルレーヴ『エルサレム 第1部』、イシガオサム訳、岩波文庫、1942年。
- ・ ラーゲルレーヴ『エルサレム 第2部』、イシガオサム訳、岩波文庫、1952年。

【問題意識】

- ・ ラーゲルレーヴとナショナリズム・民族主義の関係
- ・ それを超えるものとしての作品の「周縁」性

A. 作家について

セルマ・オットイーリア・ロヴィーサ・ラーゲルレーヴ (Selma Otilia Lovisa Lagerlöf, 1858-1940)  p.8 写真

A. 1. 経歴

- ・ 1858年 ヴェルムランド (スウェーデン南西部、ノルウェーとの国境付近) 生まれ
- ・ 1891年 『イエスタ・ベルリングのサガ』 (*Gösta Bertings saga*) 「90年代文学」の代表作。
- ・ 1901年 『エルサレム 第1部』 (*Jerusalem I*)。第1回ノーベル文学賞の候補となる。
- ・ 1902年 『エルサレム 第2部』 (*Jerusalem II*)。英語訳、ドイツ語訳などと同時出版。
- ・ 1904年 『キリスト伝説集』 (*Kristuslegender*)
- ・ 1906~07年 『ニルスのふしぎな旅』 (*Nils Holgerssons underbara resa genom Sverige*)。小学校の社会科学の教科書として執筆。
- ・ 1909年 ノーベル文学賞受賞 (女性初・スウェーデン人初)
- ・ 1914年 スウェーデン・アカデミー会員に選出 (女性初)
- ・ 1918年 反戦小説『追放者』 (*Bannlyst*)
- ・ 1933年 『土間で書いた話』 (*Talet på jordgolvet*) →ナチズム批判
- ・ 1940年 ヴェルムランドで死去。

A. 2. 文学史上の位置づけ＝「90年代」文学の代表作家

「80年代」文学 (Åttio-talet) / 自然主義文学<sup>1</sup> : 現実の社会生活を批判

〔背景〕 1850年代以降の近代化：工業化、都市化、農村の空洞化、家父長制の解体、商業・金融業の発達、中産市民階級の台頭、政治の民主化、メディアの発達

〔契機〕 ゲオルク (ゲーオウ)・ブランデス (Georg Brandes, 1842-1927 D<sup>2</sup>) 「19世紀文学主潮」

(*Hovedstrømninger i det 19de Aarhundredes Literatur*) : コペンハーゲン大学の連続講義。フラン

<sup>1</sup> 山室静『北欧文学の世界』など、日本語で書かれた北欧文学史では、ドイツ文学史とあわせて「自然主義文学」という名称が用いられることが多いが、本発表では北欧語で書かれた北欧文学史の日本語訳を用いる。これまで「新ロマン主義文学」と呼ばれることが多かった「90年代」文学についても同。

<sup>2</sup> 北欧の作家・思想家の国籍は、名前のつづりの後に国の略号で表す。D=デンマーク、N=ノルウェー、S=スウェーデン。

ス革命以降の西欧文学とデンマーク文学を比較し、デンマーク文学の反動性を指摘。

〔特徴〕・進歩主義、啓蒙主義、科学中心主義、自然主義

・後期ロマン主義文学、ピーダーマイアー文学を批判

・女性作家がデビュー、家族制度、恋愛・結婚に関する倫理、男性性・女性性がテーマに

〔代表作家〕 ヤコブセン (Jens Peter Jacobsen, 1847-85 D)、イブセン (Henrik Ibsen, 1828-1906 N)、スト

リンドベルイ (August Strindberg, 1849-1912 S)

◆

「90年代文学」(nititallet) / 新ロマン主義文学 : 「80年代」文学を批判

〔背景〕 政治の保守化、ニーチェ (Friedrich Nietzsche, 1844-1900) ・フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) の影響

〔契機〕 ヘイデンスタム『ルネサンス』(Renässans, 1889) : 「80年代」文学の、社会や人生に対する否定的な見方を批判。ポジティブな「諦念 (resignation)」に基づいて人生を肯定し、生きる喜びを描く新しい理想主義を提唱。

〔特徴〕・デカダンス、個人主義、人間の精神への関心

・「目に見えないもの」(心理、魂、美、神秘、宗教、過去、自然)

・ナショナリズム、民族主義の高揚

・ラーション (Carl Larsson, 1853-1919)、ソルン (Anders Zorn, 1860-1920) の絵画人気 (ダーラナ地方=「スウェーデン人の心のふるさと」) ◀p.8 スウェーデン地図、ラーションの絵画

・「国旗の日」(6月6日、後の建国記念日)

・「スカンセン野外博物館」

・民謡の韻・音律・独特の比喩表現

〔代表作家〕 ヘイデンスタム (Verner von Heidenstam, 1859-1940 S)、ラーゲルレーヴ、ハムスン (Knut Hamsun, 1859-1952 N) など

## B. 「国民文学」としての『エルサレム』

### B. 1. 作品について

〔ストーリー〕

19世紀末、ダーラナの一教区<sup>3</sup>で興った宗教運動により、住民の半分がエルサレムに移住する。第一部「ダーラナで」では、教区における住民の分裂と移住者の旅立ち、第二部「聖地にて」ではエルサレムとダーラナそれぞれにおける人々の苦悩と救済が描かれる。

〔人物〕

・ イングマル・イングマルソン : 主人公で、代々続く富農一族の跡取り息子。

・ 老いた使用人のために愛していない女性と結婚

・ 憎んでいるヘルグムを暴漢から救う

・ ユダヤ人の老婆の遺体が掘り返されるのを阻止する

} 「倫理的英雄」 ◀B. 2. ②

・ カーリン・イングマルドッテル : イングマルの年の離れた姉。酒乱のエリアスト結婚・死別した後、ハールヴォルと再婚する。ヘルグム派の中心人物として、エルサレムに移住。

・ イェットロード : イングマルの幼馴染。ヘルグム派を抜けてイングマルと婚約するが、イングマルがバルブ

<sup>3</sup> 「教区 (socken)」は、16世紀前半にルター派プロテスタントを国教会として導入されて以来機能してきた、教会の末端区分。宗教の単位としてのみならず、行政・司法の区分としても用いられ、生活全般の単位となった。石原 (2000)、303 ページ。

ロと結婚したため、エルサレムに移住。

- ・ ヘルグム：スウェーデン系アメリカ人の伝道師。「自由教会」(\*)の一つ「ヘルグム派」を設立し、教区民の半分を率いてエルサレムに移住する。モデルは、ウーロフ・ラーション。

(\*) 作中には、「自由教会」という名称は登場しない

- ・ ゴードン派：シカゴ(北歐形の移民が多かった)でゴードン夫妻が設立し、エルサレムに集団移住した教団。ヘルグム派はエルサレムでゴードン派に合流する。モデルは、スパフォード夫妻(Hartio Spafford, 1828-88 & Annie Spafford, 1842-1923)が設立した*The Overcomers*。
- ・ バルプロ・スヴェンスドッテル：イングマルの妻。父がイングマル屋敷を競売で競り落としたため、イングマルと愛のない結婚をするが、後にお互いに愛し合うようになる。
- ・ ヘーク・マッツ・エリクソン：ヘルグム派の一員としてエルサレムに移住するが、最終的にはダーラナに帰り、イエットレードと結婚する。

## B. 2. 作品の背景

### ① 自由教会運動

1896年、「スウェーデン福音教会 (Svenska evangeliska kyrkan)」のメンバー37人が、エルサレムに移住→ラーゲルレーヴはエルサレムでメンバーを取材、作品化

#### スウェーデン福音教会とは

スウェーデン・ダーラナ地方の「自由教会 (frikyrka)」の一つ。スウェーデン系アメリカ人ウーロフ・ラーション(Olof Larsson, 1842-1919, 『エルサレム』には「ヘルグム」という名で登場)が設立。

18世紀まで、スウェーデンのルター派国教会は、魔術・呪術と共存していたが、18世紀以降、啓蒙主義神学(neologi)が興り、スウェーデンのキリスト教から「異教的」要素を排除しようとした。「信仰復興運動(väckelserörelse)」は、これを信仰の形骸化として批判し、19世紀半ば以降、メソディズムやバプティズムの影響を受け、国教会からの分離を求める「自由教会運動」へと展開した。自由教会運動は、禁酒運動、社会民主主義労働運動とともに、三大国民運動と呼ばれ、19世紀末から20世紀初頭にかけて、相互にメンバーを重複させながら、普通選挙権獲得運動を構成した。

### ② ナショナル・アイデンティティとしての「農民像」の成立

~1880年代：農民=こっけいな笑いの対象 or 社会問題を告発するための哀れむべき対象

⇕

1890年代~：農民=スウェーデンのナショナル・アイデンティティ

- ・ エレン・ケイ『表象』(Ellen Key, 1849-1926 S: *Tänkebilder*, 1898)
- ・ カールフェルト『父祖たち』(Axel Karlfeldt, 1864-1931 S: *Fäderna*, 1895)、『頑固なダーラナ男の歌』(*En envis dalkarls visa*, 1898)
- ・ ペール・ハルストレーム『青い森の中で』(Per Hallström, 1866-1960 S: *I blå skogen*, 1896)
- ・ ストリンドベルイ『冠の花嫁』(August Strindberg: *Kronbruden*, 1901)
- ・ ポントピダン『約束の地』(Henrik Pontoppidan, 1857-1943 D: *Det forjættede Land*, 1891-95)
- ・ イェンセン『ヒンマーランドの人々』(Johannes Jensen, 1873-1950 D: *Himmerlandsfolk*, 1898)、『王の没落』(*Kongens Fald*, 1900-01)
- ・ シュライナー『アフリカ農場の物語』(Olive Schreiner, 1855-1920 南アフリカ: *The Story of an African Farm*, 1883)

## B. 3. 作品の受容と解釈

- ・ 北歐語、英語、ドイツ語、フランス語などの翻訳
- ・ 「ファンタジーと現実が融合したスウェーデン文学の最高峰」

- ・ 「ラーゲルレーヴがイブセン、ビョルンソン、アイスランド・サガと並ぶ水準にあることを示し、同時に、スウェーデン文学に世界的な名声を与えた」。
- ・ 「スウェーデンの農民階級を描いた民族叙事詩 (nationalepos)」 (以上、Nordlund(2000))  
⇒ 「倫理的英雄」という新しい農民像の成立  
スウェーデンのナショナリズム  
ドイツの郷土芸術運動 (Heimatkunstbewegung) } による受容= 「ユダヤ人と共産主義者に毒される前の健康で素朴なゲルマン的生」  
血と大地思想 (Blut- und Bodenideologie)

## C. 『エルサレム』の周縁性～「周縁者」イングマル

### C. 1. イングマルの「周縁」性⇔「国民文学」の主人公としての「中心」性

① 放浪：放浪するユダヤ人⇔定住する農民

② 片目 (障碍) ⇔ドイツとスウェーデンの「断種法」

独：1933～1945 「民族および国家の危難を除去するための法律 (Gesetz zur Behebung der Not von Volk und Reich)」

瑞：1934～1970年代 「特定の精神病患者、精神薄弱者 [直訳]、その他の精神的無能力者の不妊化に関する法律 (Lag om sterilisering av vissa sinnessjuka, sinnesslöa eller andra som lida av rubbad själsverksamhet)」

② 醜い、大柄、赤毛、そばかす⇔「アーリア人」(金髪、碧眼、白い皮膚)

### C. 2. ヨーロッパの神話・伝説との比較

① 放浪=オデュッセウス：ギリシア神話の英雄。『オデュッセイア』の主人公。10年間トロイア戦争で戦い、その後さらに10年放浪した後、妻子の待つ故郷イタケーに帰る。

② 片目=オーディン：北欧神話の主神で、死、知恵、軍、魔術などを司る。白髭・白髪の片目の老人としてイメージされることが多い。知恵を求めて世界中を旅し、片目を代償として「ミーミルの知恵の泉」の水を飲む。神々と世界の滅びの運命「ラグナロク」で、巨人族や怪物と戦い、他の神々もろとも戦死。

③ 赤毛=ロキ：北欧神話の火の神で、トリックスター。神々と敵対する巨人族の血を引きながら、神々に列席し、善行を成すことも、災いを成すこともある。光の神バルドルを殺したことで神々と決定的に対立する。ラグナロクでは巨人族側で戦い、戦死。

ユダ：新約聖書で、イエスを裏切る弟子。

(他に、カイン (旧約聖書)、セト (エジプト神話)、ラダマンテュス、テュポーン (以上ギリシア神話))

#### ・赤毛のユダ

【引用1】醜く、赤毛で、悪がきどもといつもけんかをしていたので、顔はあざだらけ、服はかき裂きだらけでした。(I Nasaret, s. 50/ p. 674)

【引用2】ユダは体が大きく、イエスには彼を引き止める力はありませんでした。(I Nasaret, s. 53/ p.71)

#### ・金髪のイエス

【引用3】彼 [引用者註：イエス] が歩いてくる間、彼の重く、輝く [引用者註：輝く ljus は、髪の色を形容すると (金髪) の意になる] 巻き毛が、彼の額と目に落ちかかってきました。(Bellehems barn, s.30/p.39)

4 引用文の末尾に、スウェーデン語原典のページを s. で、岩波文庫版のページを p. で表す。

・イングマルの格闘●B. 1. [人物]

【引用4】「ここで持てる力を使ってよいというもの面白いことだった」(Jerusalem I, s. 138/p. 281)

【引用5】「イングマルは非常に力の強い男で、男たちを一人、また一人と地面に投げつけた」  
(Jerusalem II, s. 203/p.347)

### C. 3. 「周縁性」の意義＝旧世界の終焉と新世界の到来

#### ① ギリシア神話における神々の世界の終わり与人間の世界の始まり

ヘシオドスの時代区分：金の時代、銀の時代、青銅の時代、英雄の時代、鉄の時代

鉄の時代＝人間の時代、自分が生きる現在、「労役と苦惱」。「さまざまな禍に混って、なにがしかの善きこともあるではあろうが」(『仕事と日』、28～32 ページ)

【引用6】尊い女神よ、どうかそのことでわたしにお腹立ちになりませぬよう。思慮深いペネロペイアといえども、相対して見れば、その容貌も体格もあなたに劣ることは、わたし自身十分に承知しております。こちらは人間の身、あなたは不老不死の神でいらっしゃるのだから、しかしそれでもわたしはこれまでずっと、家へ帰って帰郷の日を迎えたいと思いつづけ、それを願ってきたのです。(『オデッセイア (上)』、138 ページ、下線；引用者)

#### ② 北欧神話における神々の世界の終わり与人間の世界の始まり

「ラグナロク」(ragnarök)＝神々の運命：世界の滅亡と神々の死滅

【引用7】ヘイムダルは立ち上がって、力の限りギャラルホルンを吹き、神々は全員目を覚ます。神々は集合する。そのとき、オーディンはミーミルの泉に馬を馳せて、ミーミルから自分と味方のため、助言を求める。このとき、ユグドラシルの柁(とねりこ)は震える。天も地も、恐れおののかぬものはない。アース神と死せる戦士たちは、甲冑に身を固め、かの野を目ざして進む。黄金の兜をいただき、美しい甲冑を身にまとい、グングニルという槍を手にしたオーディンが先頭を切って馬を進める。目指す相手はフェンリル狼なのだ。(中略)『巫女の予言』には次のように言われている。(中略)

太陽は暗くなり／大地は海に没し／煌く星は／天より墜つ／煙と火は／猛威をふるい／火炎は天をなめる (中略)

さて、ホッドミーミルの森といわれるところに、スルトの焰が燃えさかっている間、リーヴとレイヴスラシルという名の二人の者が身を隠して、朝露で生命をつないでいた。この二人から全世界に住むほどおびただしい子孫が生まれるのだ。(「ギェルフィたぶらかし」、『エッダ』所収、276 ページ～、下線；引用者)

#### ③ 「周縁者」イングマルの可能性

- ・父祖たちと同じ生き方をする(ダーラナの中心的人物として)
  - || 神に祝福された生
  - ・エルサレムで真の信仰を追及(開墾者＝指導者、中心人物として)
- } どちらも拒否

【引用8】人間のもっとも大きな幸せは、自分が必要なものを自分で作り上げ、自分が何の役に立つかを示すことで、だからこそ、古いものは去らなければならなかったんだよ。そんなふうに考えると、僕は、なぜ我らが主が国を滅ぼし、街を荒廃させ、人間の業を風雨にさらすに任せたのか、分かったんだ。人間がいつでも何かを作り上げ、何ができるかを示せるように、そうなったんだよ。主がお望みなのは、僕たちが屋敷と開墾された農場を相続することじゃなくて、自分のものになるべきものを、新しく自分の手に勝ち取ることなんだ。

(中略)

あの場所で起こり始めているたくさんの方のことを僕は見てきた。主は人々をあらゆる国からあそこへ、お呼びよせになった。主はいわば前哨をお立てになったんだ、ある者は街々に、ある者は村々に。僕は長生きしたいと思うよ、主が彼らすべてを立ち上がらせ、眠っている国を覚めさせ給う日が来るのを、見ることができるように。(Jerusalem II, s. 249-250/p.427、下線；引用者)

【引用9】そしてユダはそこに横たわり、イエスの前の砂地を犬のように転げまわって彼の足にキスし、自分が粘土のカッコウ鳥にしたように、足を上げて自分を踏みつけてくれと頼みました。

というのは、ユダはイエスを愛し、尊敬し、崇拝すると同時に、彼を憎んでもいたからです。

しかし、子どもたちの遊びをずっと見ていたマリアは、立ち上がってユダを抱き起こし、抱きかかえて優しくなでてやりました。

—かわいそうな子！と彼女は彼に言いました。あなたは、自分が創られたものにはできないことをしようとしたのを知らなかったのね。人間の中で最も不幸な者になりたくなければ、そんなことにはもう二度と手を出さないことよ。わたしたちが、太陽の光で色を塗ったり、死んだ土くれに命の息吹を吹き込む者と張り合おうとしたって、どうやってうまく行くというの？ (I Nasaret, s. 53/p.72)

#### ◆ユダとイングマルの相違点

##### 1) 自己認識

・「かわいそうな子 (Du stackars barn)」ユダ (マリアの台詞)                      stackar=poor (en)

⇕

・「ごくちっぽけな人間 (en stor stackare)」イングマル (Jerusalem II, s. 261/p.451)

##### 2) 「変容」の有無

【引用10】彼女はイングマルがそのようであるのを見たことがなかった。顔全体が変わっていた。彼女は、何かが無骨な顔立ちを変容させ、その結果彼が本当に美しく見えるのだと思った。(Jerusalem II, s. 259/p. 447-448、下線；引用者)

・「変容した」(förklarade) ⇔ 「キリストの変容」(Kristi förklaring)

【引用11】この話(引用者註：死と復活の予告)をしてから八日ほどたったとき、イエスは、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり (blev hans ansiktet förvandlat)、服は真っ白に輝いた。見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。

(「ルカによる福音書」9。同内容：「マタイによる福音書」17、「マルコによる福音書」9)

◆今の世界の「周縁者」として生きる＝まだ見ぬ世界／自分は生きることのない新世界への可能性を開く

## 【発表者情報】

ホームページ：[http://www7b.biglobe.ne.jp/~nakamaru\\_teiko/index.html](http://www7b.biglobe.ne.jp/~nakamaru_teiko/index.html)

「業績」欄から、これまで雑誌に掲載された論文がPDFでお読みいただけます。

- ▣他の人物の周縁性—狂気を論じたもの：「太陽と死」(2007)
- ▣「農民」イングマルの道徳と暴力を論じたもの：「男性・農地・健康／女性・森・病」(2009)
- ▣ヘルグム派について論じたもの：「死・救済・天啓」(2009)

メールアドレス：[nakamart@kme.biglobe.ne.jp](mailto:nakamart@kme.biglobe.ne.jp)

## 【参考文献】

### 〔一次文献〕

- ・ Lagerlöf, Selma: *Jerusalem I. I Dalarne*, Stockholm (Albert Bonniers Förlag) 1984
- ・ Lagerlöf, Selma: *Jerusalem II. I det heliga landet*, Stockholm (Albert Bonniers Förlag) 1984
- ・ Lagerlöf, Selma: *INasaret. I: Kristuslegender*, Stockholm (Albert Bonniers Förlag) 1984
- ・ ラーゲルレーヴ『エルサレム 第1部』、石賀修訳、岩波書店、1942年。
- ・ ラーゲルレーヴ『エルサレム 第2部』、イシガオサム訳、岩波書店、1952年。
- ・ ラーゲルレーヴ『キリスト伝説集』、イシガオサム訳、岩波書店、1955年。
- ・ アウグスト、ピレ監督『エルサレム』、ウルフ・フリベリ、マリア・ボネヴィ出演、東北新社、2001年（映画公開1996年）。  
※スウェーデン語原文は、「プロジェクト・リュネベレイ」内の以下のURLからも読むことができます。  
<http://runeberg.org/authors/lagerlof.html>

### 〔二次文献〕

- ・ Bexell, Olof: *Sveriges kyrkohistoria 7. Folkeväckelsens och kyrkoförnyelsens tid*. Stockholm (Verbum) 2003.
- ・ Edström, Vivi: *Selma Lagerlöf. Livets vägspel*. Uddevalla (Natur och Kultur) 2002.
- ・ Nordlund, Anna (red.): *Selma Lagerlöf 1858-2008...* Kungli. bibliotekets utställningskatalog nr 153, Solna (Alfa Print AB) 2008.
- ・ Schnurbein, Stefanie von: *Darstellungen von Juden in der dänischen Erzählliteratur des poetischen Realismus*. In: *Nordisk. Jüdisistik. Scandinavian Jewish Studies* 25:1, S. 57-78.
- ・ Watson, Jennifer: *Swedish Novelist Selma Lagerlöf, 1858-1940, and Germany at the turn of the century. O du Stern ob meinem Garten*. Scandinavian Studies Vol.12. Lewiston/Queenston/Lampeter(The Edwin Mellen Press) 2004.
- ・ 荒井献ほか『新約聖書外典 《聖書の世界》別巻3・新約1』、講談社、1974年。
- ・ 石原俊時『市民社会と労働者文化』木鐸社、1996年。
- ・ 石原俊時『スウェーデン近代と信仰復興運動』（今関恒夫ほか著『教会』所収）、ミネルヴァ書房、2000年、p.299-337。
- ・ オルリック、アクセル『北欧神話の世界 神々の死と復活』尾崎和彦訳、青土社 2003年。
- ・ コラム、パードリック『北欧神話』尾崎義訳、岩波書店、1955年、新版2001年。
- ・ 高橋裕子『世紀末の赤毛連盟 象徴としての髪』、岩波書店、1996年。
- ・ 谷口幸男訳『エッダー—古代北欧歌謡集』、新潮社、1973年。
- ・ ハイド、ルイス『トリックスターの系譜』伊藤誓、磯山甚一、坂口明德、大島由紀夫訳、叢書ユニベルシタス756、法政大学出版局、2005年。
- ・ ヘシオドス『仕事と日』、松平千秋訳、岩波文庫、1968年。
- ・ ホメロス『オデュッセイア』、松平千秋訳、岩波書店（文庫上下巻）、1994年。
- ・ 松村一男『神話学講義』、角川書店、1999年。
- ・ 山室静『北欧文学の世界』東海大学出版会、1969年。

地図・画像資料



①北欧諸国の地図



②スウェーデンのレーン (län=県 or 州)



③旅行服を着たラーゲルレーヴ (1900年撮影)



④カール・ラーションの絵。ラーションは、ダーラナ地方の一般の人々、とりわけ自身の家族を題材とし、人気を博した。

【画像引用元】

- ①海外旅行の専門店 エス・ティー・ワールド 北欧諸国特集 <http://stworld.jp/feature/northern-europe/>
- ② UPPS Sverige Semester (スウェーデン語の旅行サイト) [http://www.upps.at/main/region\\_detail.php?land\\_id=36&lang=se](http://www.upps.at/main/region_detail.php?land_id=36&lang=se)
- ③ Nordlund, Anna (red.): *Selma Lagerlöf 1858-2008...* Kungli. bibliotekets utställningskatalog nr 153, Solna (Alfa Print AB) 2008.
- ④ Larsson, Carl: *A Home. Paintings from a Bygone Age.* Edinbrugh (Floris Books) 2006